

ありふれたマスターで世界最強

自宅警備員予備軍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人理修復を終えたマシユと立香。

平和な高校生活を送るはずが、異世界に召喚されてしまうのだった。

2部とか1・5部1部ネタバレ、ありまする…なので、嫌な方は、見ないほうがいいかもです！すいません（――；）

目次

プロローグ	1
第一話 勇者一行	5
第二話 みんなのステータス	9
第三話 異世界の魔法	14
第四話 最弱と不幸	18

プロローグ

人理修復を終え、17歳から学生生活を送るようになったわたしとマシユ。お偉いさん方への説明に3か月ほどかかって、わたしたちは晴れて普通(?)の学生としての時間を取り戻せたのである。

まあ、失った1年は、マシユ一緒にいるということ、これから取り返していこう。

そう決めて、入学して、偶然マシユと同じクラスになったが、そのおかげか、友達作りを疎かにしてしまった。違うクラスになったら、それはそれでいやだったし、そこはいいだろう。

ちよつとオタクな趣味があつて、腐のグループに連れていかれかけたが、わたしのバイト先の息子さんの南雲くん、そしてその友達(お世話役みたいになりつつある)の香織、雫と一緒にいることが多い。

香織は南雲くんに好意があるようだが、南雲くんはいつも割と露骨なアピールをされているのに気づいていない。ここはニヤニヤしながら見守っておこう。

香織も雫も、男子人気も女子人気も高いため、クラス中から冷たい視線が南雲くんに浴びせられ、当人は困っているようだ。まあ、頑張れ・・・南雲くん、香織・・・。

ちなみに、マシユはわたしの嫁✓しかないので、嫉妬なんてさせない。

「よお、キモオタ! また、徹夜でゲームか? どうせエロゲでもしてたんだろ?」

「うわっ、キモく。エロゲで徹夜とかマジキモイじゃん」

一体何が面白いのかゲラゲラと笑い出す男子生徒達。

南雲くんに話掛けてきたのは、檜山大介といい、毎日飽きもせず日課のようにハジメに絡む生徒の筆頭だ。近くでバカ笑いをしているのは斎藤良樹、近藤礼一、中野信治の三人で、大体この四人が頻繁に南雲くん絡む。

南雲くんへの嫉妬の結果がこれだ。実際は、わたしも一緒に南雲くんのお母さんと仕事をしていたのだが、彼らがそれを知る由もなく。結局、一徹くらい大丈夫と思つて寝ずにVRマシユをしていたわたしに一番ダメージが入っていた(実は鞆の中にも隠して入れてある)。「南雲くん、おはよう！今日もギリギリだね。もつと早く来ようよ」いつも通り、香織が声を掛ける。うん、ここで落ち込んでマシユにフォローされたら何も言えない・・・仕方ない。

「昨日はお疲れ様です！」

「おはよう白崎さん。あと、藤丸さん・職場じゃないから公私混同しないで・・・」

疲れ果てた表情で、南雲くんは机に突っ伏した。

これで完璧だ・・・いつも通りを装いつつ、南雲くんのフォローもする。

「大丈夫です、ハジメさん。昨日、VRマシユをしてる人もましたから／＼／＼」

赤面しつつそう言ったのは、マシユだった。

そういうフォローの仕方は間違ってるよ、マシユ・・・実際にないからね・・・。

・・・？何でそのことをマシユが知ってるの!?

そして、マシユの右手には、わたしがアイマスクと称して持っているそれを右手に持っていた。

「VRマシユ!?!」

「何故そのことを知っている!?!」

クラス中の視線が、一気にわたしに集まる・・・が、私とその視線から目を逸らすと、「またアイツか・・・」とでも言うような、大きなため息が漏れた。

「先輩のことは何でも知ってますから・・・」

と微笑む純粋な笑顔の中は、狂気に染まっていた・・・。

その発言に、今度は教室が凍り付く。

「な、南雲くん・・・。毎日大変ね・・・」

「香織またそんなヤツの世話焼いてるのか？香織は優しいな」

「まったくだ。やる気のないヤツにやあ何を言っても無駄だと思っけどなあ」

雫がそう切り出すと、天之河くん、坂上くんと続く。坂上くんは、努力や熱血、根性といった言葉が好きで、いつも寝てばかりの南雲くんは気に入らないらしく、フンつと鼻で笑って興味がないように無視した。

「おはよう、八重樫さん、天之河くん、坂上くん。はは、まあ自業自得とも言えるから仕方ないよ」

「わかっているなら直すべきじゃないか？いつまでも香織の優しさに甘えるのはどうかと思うよ」

天之河くんにこう言われるも、『趣味の合間に人生』を座右の銘とし、親の元(母は売れっ子漫画家で、わたしと一緒に手伝い。父はゲームプログラマーで、こちらも手伝いをしている)で即戦力級の技術を持っている将来安定の南雲くんは、苦笑いをするのだった。

「あはは・・・」

(もういつそ、こいつら異世界召喚とかされないかな？ どう見てもこの四人組、そういう何かに巻き込まれそうな雰囲気ありありだろうに。……どこかの世界の神か姫か巫女か誰でもいいので召喚してくれませんか？)

ハジメがそんなことを考えていると、地面が光り、魔法陣が完成していた。

(先輩、魔術でしようか？見たこともない文字ですが・・・召喚に似た感覚があります)

(わたしも魔術にはそこまで詳しくはないけど、召喚？・・・あとは拘束？マシユ、警戒して)

わたしたちは全員、金縛りのような状態になっていて、体の自由が利かない。

クラスの担任で、マスコットののような存在の愛子ちゃんこと、愛子先生が、

「皆、教室から出てください！」

と叫びながら駆け寄ったのと同時に、光がわたしたちを包んだ。

「備品やら鞆やらを残して、わたしたちは姿を消した。
その後、神隠しとして大事件となり、神秘の隠匿のため、魔術協会
の仕事が増えたのは、別の話である。」

第一話 勇者一行

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎いたしますぞ。私はイシュタル・ランゴバルト、この聖教教会にて教皇の地位につくもの。よろしく願います」

そうして、70代くらいのおじいさんが、周りを囲む法衣を着た人たちの中から出てくる。

周りには、晩餐会でもできそうな大きな机や椅子があり、壁には美しい壁画が飾ってある。

いや、そんなことはそうでもいい!!メイド、メイドだ! コスプレでアストルフォもなく、アルトリア、オルタ水 着でもなく・・・本物の美女、美少女メイドだ!

「先輩・・・?」

フアツ、殺気!

冷たい視線と殺気が愛しの後輩からしたので、愛しの後輩に抱き着いて視界を覆う。

「先輩・・・いいですよ。許します」

「さ、さぞ混乱されているでしょう。説明致しますので、最後までお聞きください」

若干引かれてる!?!私はマシユに頬擦りしながら説明を聞く。

促されるまま椅子に座り、生徒たち全員は配られた飲み物を飲み、イシュタルさんの話を聞く。

要約するところだ。

・わたしたちを召喚したのは、エヒトというこの世界の唯一の神様である。

・この世界には、3つの種族がいて、まずは数の多い人間族、樹海に暮らす獣人、魔物を従える魔族にわかれている。

・人間族が魔族と戦うためにわたしたちは召喚され、常人の10倍ほどの力を与えられている。

・わたしたちが還る手段は今のところ存在しない。

「皆、ここでイシュタルさんに文句を言っても仕方がない。彼にだつてどうしようもないんだ・・・俺は戦おうと思う。人類の危機にある

のは事実なんだ。それを知って放っておくなんて俺にはできない。それに、救済が終えれば、俺たちも世界に還れるかもしれない。どうですか、イシユタルさん？」

「そうですね。救世主の望みならば、神も無碍にはなさらないはずですよ」

そこからイシユタルさんが、魔族の行った残虐非道な行為を語って天之河くんがそれにとっても反応していた・・・。

「俺は戦う。人々も救い、必ず世界に還ってみせる！俺が、世界も皆も救ってみせる」

天之河くんがぎゅつと拳を握り歯をキラつと光らせる。

そこでカリスマ発動！味方全体の攻撃力アップ・・・ではなく、クラス中が賛同しただしたのだ。一部の女子に至ってはうっとりしている。「へっ、お前ならそういうと思ったぜ！お前だけだと心配だからな。俺もやるぜ？」

「龍太郎」

「今のところ、それしかないわよね。・・・気に食わないけど・・・私もやるわ」

「雫・・・」

「え、えっと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ！」

「香織・・・」

やっぱりこうなってしまうたかあ・・・。

わやしやマシユがいくら抗議しても無駄だった。

愛子先生こと愛ちゃんもオロオロしながら

「だめですよ」

と言っているが、天之河くんのカリスマの前では無意味のようだった。

最終的には、生徒全員が戦うことになった。

「ではそろそろ降りましょうか。麓では、ハイリヒ王国が勇者様方を迎え入れる準備がしてあります」

話し終えたのを見計らったイシユタルさんが凱旋門もかくやという巨大な門にわたしたちを誘導する。

ここは「神山」というところらしく、山頂にあるらしい。その麓にあるハイリヒ王国が、わたしたちを歓迎してくれるらしい。

王国は聖教教会と密接な関係があり、聖教教会の崇める創世神エヒトの眷属であるシャルム・バーンなる人物が建国した最も伝統ある国ということだ。国の背後に教会があるのだからその繋がり強さが分かるだろう。

「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれん『天道』」

そうすると、大きな台座が生まれ、ロープウェイのようになっていた。

(先輩・・・この世界は・・・)

(うん。きつとこの世界は今が神代なんだろうね。マナの密度とか、空気とかがバビロニアに近い感じがする)

生徒たちはキャツキヤと魔法に興奮し、わたしはマシユとイチヤイチャを楽しんでいた。やがて雲を抜け、国の景色が一望できた。

王宮につくと、玉座の間に向かった。

そこは、さつきの教会と同じかそれ以上豪華だった。キヤメロットとは比べ物になら・・・いや、なんでもありません。マシユさん、殺気放つのやめていただけませんか？

国王の名をエリヒド・S・B・ハイリヒといい、王妃をルルアリアというらしい。金髪美少年はランデル王子、王女はリリアーナという。

周りの人たちの視線がに行く。南雲くん、香織・・・がんばれ！

ランデル殿下も香織に魅かれたらしく、話しかけている。

・・・がんばれ！

翌日からわたしたちへの授業と訓練が始まった。

騎士団長がつきつきりでわたしたちに教えるので、大丈夫かと思っただが、当の団長は、

「面倒な雑務を副長に押しつけられぜー」

と、豪快に笑っていたので、大丈夫だろう。・・・副長さん・・・お疲れ様です。

その前に、ちっちゃい銀色のカードが配布された。

「よし、全員に配り終えたか？これは「ステータスプレート」というものだ。これは名前の通り、自身のステータスを客観的に数値で表せる優れたものだ。同時にこれは身分証明書でもある。これで迷子になっても大丈夫だぞ！失くすなよ？」

そして、わたしたちのステータスを確認することになったのだ。

第二話 みんなのステータス

わたしのターン、ドロロー!

わたしのステータスカードを見ると、そこには衝撃的な事実が!

藤丸立香 17歳 女 レベル:1

天職:マスター

筋力:30

体力:40

耐性:20

敏捷:40

魔力:130

魔耐:60

技能:令呪、応急手当、緊急回避、瞬間強化、全体強化、ガンド、オーダーチェンジ、全体回復、霊子譲渡、コマンドシヤツフル、オシリスの塵、イシスの雨、メジエドの目、召喚^{ガチャ}、触媒生成^金、冥界の護り、毒耐性、忍術(早着替え)、■■■■、■■■■、■■■■、槍術、ルチャリブレ、言語理解

・・・は?

天職マスターって何?あれが天職だったのかあ・・・。礼装なしで魔術が使えるようになってるのはどゆこと?魔術回路が増えた感じはしないのに・・・ん?魔術師じゃない辺りですべてを察した。

文字化けしてるのは何なんだろう・・・?

すごい力が覚醒することを期待しておこう。

召喚^{ガチャ}、触媒生成^金・・・まあ、これに関しては触れないでおこう。筋力が異常に高いのは、女子力を疑ってしまう。槍術・・・師匠のスパルタ訓練を思い出してしまった・・・。ルチャリブレは・・・うん、ね。「先輩・・・私のステータスプレートも見ますか?」

マシユのステータスプレートを見ると、格の違いを見せつけられた。

マシユ・キリエライト 17歳 女 レベル：1

天職：守護騎士

筋力：70

体力：130

耐性：100

敏捷：30

魔力：50

魔耐：80

技能：魔力防御、全属性耐性、魔力耐性、毒耐性、麻痺耐性、恐慌耐性、金剛、回復魔法、盾術、槍術、料理、言語理解

チートやん。槍術は、おそらくだが、レオニダスを師としていたので、その時に覚えたのだろう。圧倒的な格差に打ちひしがれていたわたしだったが、南雲くんはさらに肩をがっくりと落としていた。

「な、南雲くん・・・大丈夫だよ」

なんとなく察したので、深く聞かないでおこう・・・。

「ステータスは、日々の鍛錬で上昇するし、魔術具なんかでもあがる。あと、お前らには、国でも最上級の装備を選ばせてやる。宝物庫大開放だな！」

なるほど、じゃあ筋トレと魔術の鍛錬だけで簡単に強化できるのか・・・魔術回路とか関係なしに魔術が上手くなるってこと・・・？まあ、そこはそもそも魔術の体系がちがうっぽいから、もう少し調べてみよう。

「あと、天職っていうのはいうなれば才能だ。技能に連動していて、その分野において、無類の強さを発揮する」

ということとは、わたしが槍や銃を持ってても、本職には及ばないということか・・・。ってことは、マスタースキルが若干強化されているかもしれない。

「ちなみに、レベル1では、ステータスは10くらいが平均だ。まあ、お前らはその数倍や数十倍だ！全く羨ましい限りだ！あと、見終えたら報告に来てくれ。訓練のメニューを考えねばならんからな」

南雲くんは絶望した表情をしていた。やめて、彼のライフはもう0

よ！

天之河光輝 17歳 男 レベル1

天職：勇者

筋力：1000

体力：1000

耐性：1000

敏捷：1000

魔力：1000

魔耐：1000

技能・全属性適正、全属性耐性、物理耐性、複合魔法、剣術、剛力、縮地、先読、高速魔力回復、気配感知、魔力感知、限界突破、言語理解

そういえば、雫の道場で剣道を習っていたらしい。うん。イケメン勇者でオレTRUEEとか、ふざけんな。

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で既に三桁か……。技能も普通は二つ三つなんだが……。規格外な奴め！頼もしい限りだ！」
「いや、あはは……」

団長の称賛に照れたように頭を掻く光輝。ちなみに団長のレベルは62。ステータス平均は300前後、この世界でもトップレベルの強さだ。しかし、光輝はレベル1で既に三分の一に迫っている。成長率次第では、あっさり追い抜きそうさ。

しかも、基本的に技能は才能らしいから、後天的につくものはないらしい。

唯一の例外として、派生技能というものがあるらしく、それは、長年磨いて壁を超えることで、得られるらしい。

これで、わたしのスキルレベル10になっていたマスタースキルが技能になっていたり、死んでも冥界の門から引っ張り出すという教育方法で叩き込まれた槍術ケツアルコアトルがついていたのだ。ルチャリブレに至っては、死ぬ寸前まで何回もどこかの神霊に技をかけられたので、受け身

は完璧だ。

「ほお、守護騎士・耐久もかなり高いし体力も多い。スキルも大量にある。勇者と同じくらい強さも知れんぞ！」

次はわたしの番だ・・・こわい。

「ステータスも全体的に高め、魔力は勇者すら凌ぐほどか・・・。だが、天職も技能も見たことがないものばかりだ・・・。文字化けなんてはじめてだな・・・」

このあと文字化けが治るかと思ってもう一度試したが、変化はなかった。

「ああ、その、何だ。錬成師というのは、行ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときには便利だとか・・・」

「薬品の合成や、生成なんかもできるんですか？」

そう尋ねると、団長は大きく頷いた。ちよつと南雲くんを慰める意味もあったのかもしれない・・・。

「人体錬成とか禁忌犯したら身体持っていけたりするから気を付けてね！」

某鋼な錬金術師の話をするが、落ち込んだ様子で俯いている。

「おいおい、南雲。もしかして、お前非戦系か？鍛冶職でどうやって戦うんだよ？メルドさん、その錬成師って珍しいんですか？」

「・・・いや、10人に一人くらいは持っている。国のお抱えの鍛冶師は全員持っているな」

「おいおい、南雲く。お前、そんなに戦えるのか？」

檜山くんが、南雲くんに絡んでいく。

「さあ、やってみないと分からないかな」

「じゃあさ、ステータス見せてみるよ。天職がシヨボい分ステータスは高いんだろ？」

檜山くんの取り巻きと、男子生徒たちはニヤニヤしている。

香織や雫に惚れていて、香織と雫の不愉快そうな顔に気づかない時点で、香織と雫には見合わないよ、男子諸君。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：1

天職：	鍊成師
筋力：	10
体力：	10
耐性：	10
敏捷：	10
魔力：	10
魔耐：	10
技能：	鍊成、 言語理解

第三話 異世界の魔法

「ステータスはトレーニングで上昇するらしいし、ここから伸ばしていこう。錬成を使った戦術も組めるから……うん、戦えるはずだよ」
例え自分に力がなからうと、戦うことはできるはずだ。錬金術は、魔力が少なくても使えるので、錬成について詳しく調べれば、少なくとも私よりは戦えるようになるだろう。まあ、錬成と錬金術が同じなら、だけど。

「そうですね、南雲くん！先生も同じ非戦系？とかいう天職ですし、ステータスだってほとんど平均です。南雲くんは1人じゃありませんからね！」

畑山愛子 25歳 女 レベル：1

天職：作農師

筋力：5

体力：10

敏捷：5

魔力：100

魔耐：10

技能：土壌管理、土壌回復、範囲耕作、成長促進、品種改良、植物系鑑定、肥料生成、混在育成、自動収穫、発酵操作、範囲温度調整、農場結界、豊穰 天雨、言語理解

南雲くんがそれを見て絶望していた。同じだと思っていただけに傷が深かったようだ。

「愛ちゃん……悪気が無い分性質が悪いわね……」

「では、訓練を始める。魔術系と物理系に分かれて別の訓練を行う。呼ばれた者は、俺についてきて、残りは、そちらの宮廷魔術師団についていくように」

愛ちゃんは座学と畑の見回りと、畑を耕しにいったらしい。

今日の訓練の様子を見て、ステータスの影響が大きく出ていることがよくわかる。魔術の感覚の実験ついでに、身体強化の魔術をかけな

がらでも、差が出てしまう。だが、強化された身体の感覚に慣れていない感じだったので、まだまだ伸びそうだ。

（魔力が増えたから出力が変わったのかな？なら、魔術のバリエーションが増えるかも・・・。鍛錬次第でが変わるなら修行次第で・・・神秘の隠匿・・・はここで意味があるのかな？この世界は神代らしいけど、真エーテルがあるかどうかはわからないから、慎重に行動しよう・・・）

それから二週間、この世界の魔法について調べた。

・この世界で適正のない魔法を使うには、属性・威力・射程・範囲・魔力吸収（体内から魔力を吸い取る）の式が必要で、後は誘導性や持続時間等付加要素が付く式を加えた魔法陣を描かなければいけない。

魔力吸収できるのは、オドであってマナではないので、宝石剣ゼルレッチのようなものを作れると思ったが、なかなか難しい。

・この世界では、魔力が多い者は、ステータスが高くなる。

おそらくだが、魔力の一部から、身体強化に回しているのだろう。

・この世界には魔術回路は存在せず、魔法は魔法陣と詠唱に依存していて、魔物の固有魔法以外で、シングルアクションの魔法は存在しない。

・魔物の固有魔法は、全身に魔力が直接巡っていて、魔力が変質する。その魔力が生み出していると言われる。体内で変質した魔力は、骨や肉に浸透し、驚異的な身体能力を与える。

この変質した魔力とは、魔術刻印に近いもので、魔法陣も詠唱も必要としない。だが、魔力自体が変質・・・？やっぱりこの世界の魔法に関しては、一から勉強しないとイケなさそうだ。

図書室で魔法について調べていると、ドスンという音がして、目を向けると本を落として南雲くんが司書に睨まれていた。

「南雲くん、大丈夫？」

「あ、藤丸さん。ありがとう、大丈夫だよ」

一緒に落とした本を片付け終わると、南雲くんが自嘲気味に微笑んで、ステータスプレートを見せてくれた。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：2

天職：錬成師

筋力：12

体力：12

耐性：12

敏捷：12

魔力：12

魔耐：12

技能：錬成、言語理解

「藤丸さんのも見せてくれない？」

そう言われ、わたしのステータスプレートを見せる。

藤丸立香 17歳 女 レベル：2

天職：マスター

筋力：60

体力：50

耐性：40

敏捷：60

魔力：150

魔耐：60

技能：令呪、応急手当、緊急回避、瞬間強化、全体強化、ガンド、オーダーチエンジ、全体回復、霊子譲渡、コマンドシヤツフル、オシリスの塵、イシスの雨、メジエドの目、召喚^{ガチャ}、触媒生成^{課金}、冥界の護り、毒耐性、忍術（早着替え）、、槍術、ルチャリブレ、言語理解

南雲くんは、それを見て苦笑いしていた。こんな状況でも、諦めずにここでしっかり調べものをしてるだけでも、十分すごいと思うんだけどな。

召喚^{ガチャ}に関しては、この国のお金で触媒生成^{課金}したところ、とんでもない費用が掛かったので、一回だけして、まさかの死霊魔術^{概念礼装}だった…。いや、強いしうれしいんだけどね？うん。

この世界の魔力の使い方にも慣れて、いつものトレーニングで筋肉

が・・・女子力と引き換えに上がった・・・。成長速度にも補正がかかっているのかもしれない。

秘密兵器も完成し、魔術と魔法を合わせて魔術を補助したり、魔法を魔術を補助することに成功した。

「よお、南雲。なにしてんの？ お前が剣持っても意味ないだろうが。マジ無能なんだしよ〜」

「ちよっ、檜山言い過ぎ！いくら本当だからってさ〜、ギャハハハ」
「なんで毎回訓練に出てくるわけ？俺なら恥ずかしくて無理だわ！」
「なあ、大介。コイツさあ、なんかもう哀れだから、俺らで稽古つけてやんね？」

「いったい何が面白いのかニヤニヤ、ゲラゲラと笑う檜山達はそんな調子でハジメを人目につかない方へ連行していく。」

「いや、一人でするから大丈夫だって。僕のこととは放っておいてくれていいからさ」

一応、やんわりと断ってみるハジメ。

「はあ？俺らがわざわざ無能のお前を鍛えてやろうってのに何言ってるの？マジあり得ないんだけど。お前はただ、ありがとうございませうって言っとけばいいんだよっ」

そう言つて、檜山がハジメを殴ろうと拳を握るが、その拳はハジメにはあたらなかった。

第四話 最弱と不幸

その拳はハジメにあたらなかつた。

ハジメの姿が影のように消えて、檜山の拳が空を切る。拳が当たる前にハジメが尻餅をついたのだ。

落雷のような轟音と鏡に反射したような光が急に発生して、尻餅をついたのだ。

「どうした、何があつた!?!」

轟音を聞いて駆け付けた人たちが「敵襲か!?!」と叫んだり、「またフジマルが何かやらかしたか!」と嘆きながらその場にたくさん人が集まる。

「い、いや、俺たちはただ訓練してたら急に……」

檜山たちがたじろぎながら答えた。そのあと、事情聴取をされた。だが、自分たちも何も知らないで急に発生したので、すぐに解散になった。

身体が重かつたので、座り込むと、余計に重く感じてそのまま図書館で眠ってしまった。

「南雲くん、大丈夫だった!?!」

その夜、全員で集まって話し合いになり、話を聞いた瞬間に香織がハジメに駆け寄った。ハジメが図書館で倒れていたと聞いて全員が集まったのだ。

「うん、大きな音と光が発生しだけで、僕には特に何の影響も……」
言い切る前に、ハジメはその場で倒れてしまった。倒れる前に覚えているのは、床にぶつかって痛かったことだ。

「「南雲（くん）!?!」」

派手に倒れたのでよく視ると、どうやら魔力の大半を使ってしまったようだ。重症じゃなさそうではあったが、今回の件は、南雲くんが発動させたのだろうか。

「香織、魔力が切れちゃっただけっぽいから。それ以上締め付けたら

逆に南雲くんが・・・」

焦って南雲くんを揺さぶっていたせいで、余計に顔色が悪くなっていた。

魔力吸収を応用した魔法陣を使って、魔力を与え、香織が治癒すると、顔色はみるみるうちによくなっていた。

「で、何があったの？」

雫が、檜山くんたちに視線を向けると、説明を始めた。その話によると、4人で南雲くんの訓練を行っていたところ、急に光と音が発生したらしい。でもおかしいな・・・音はともかくとして、南雲くんに光の適正はなかったはずなのに・・・。

「ふうん・・・訓練、ねえ？」

雫は視線を鋭くし、今度は訝しむような視線を向けた。でも、魔力だけこんな減らすほどの、スパルタ訓練は思いつかない。やっぱり、南雲くんが自分で発動させたのだろうか。

「訓練するのはいいけどオーバーワークは身体を壊す。しっかり南雲の体調のことも考えろ」

対照的に、一切疑いを持っていない天之河くんが、注意する。

「南雲がこんなになるまで必死に訓練してたはな・・・。図書館に籠りきりだと思っていたが、見直したぜ」

と、続いて坂上くん。そんな感じではなさそうだけど、ここは黙っておくことにした。

さつき視たときに、南雲くんから誰かへのパスが繋がっているのを感じた。

ということは、ゴーレムでも錬成したのか、それとも・・・いや、それはないだろう。異世界まで来て、聖杯戦争だなんて。

あれ、今のセリフめっちゃフラグっぽいな・・・。

「先輩、さつきの南雲さんは・・・」

マシユも気づいていたようだ。もう一度、今回の件について詳しく調べてみる必要がありそうだ。

「あの、立香ちゃん僕、南雲くんから幽霊みたいな気配を感じて・・・」

後ろに立っていた恵里が、震えながらそう呟いた。想像しうる限り、最悪な事態かもしれない。

この幽霊が、英霊だったとしたら、南雲くんの魔力だけでは召喚できない。つまり、聖杯があるということだ。

「そうなんだ・・・怖かっただろうに、わざわざ伝えてくれてありがとう、恵里。でも、わたしが見た限り、悪霊とかじゃなさそうだし、大丈夫だと思うよ」

何かに取り憑かれたり、悪霊の気配なんかを感じなかったのは事実だし、あまりこの件に深くかわわらないようにしておかないと・・・。

「え、立香ちゃんも幽霊が見えるの!？」

あ、ヤバ。マシユ・・・はもう部屋に戻ってるか・・・。何とか誤魔化さない!？」

「いやあ、ほら、その、霊感的な・・・」

多少なりとも魔術に手を染めた人間として、こんな事態にまで巻き込むわけにはいかない・・・。

わたしは、へたくそな言い訳をして、その場から立ち去ろうとする。「ちよつと待って!怖いから、今日は寝るまで一緒にいて?」

ボクっ娘との朝チュンイベントか!?!と一人で盛り上がっていたが、ずつと話を聞いて、寝落ちしてしまった。

翌日、南雲くんの右手を見ると、令呪は浮かんでいなかった。

よくよく考えると、魔術回路もないのに、令呪が浮かぶわけもなかったのだ。

なら、何かとパスが繋がっているのは、恵里が幽霊を見たのは、一体どういうことなんだろうか。魂でも錬成したのだろうか。如何に神代とはいえ、そんな魔法はトータスの神代魔法くらいでしか、聞いたことがない。